投稿《旅行記》

ロシア視点で見たハルビン・長春の旅

菅原 信夫

（一般社団法人 SRC 湘南ロシア倶楽部・専務理事／一般社団法人ディレクトフォース国際研究ユニット・代表幹事）

【背景】

本年５月、私（菅原）は４名の仲間と共に中国のハルビンと長春を４泊５日で訪問しました。皆、一般社団法人 SRC というロシアを研究対象とする団体のメンバーです。SRC では「ロシアを国境外側から見る」というテーマのもと、昨年はフィンランド、エストニア、そして本年はハルビン・長春を訪問しました。旅のアレンジはもちろん JIC さん。我々には非常に信頼できるパートナーです。

【ハルビンの感想】

成田からの直行便が到着するハルビンはそもそもロシア人によって作られた街です。1920 年代には中国人 20 万人、ロシア人 10 万人が暮らす近代都市となり、「東方のモスクワ」、「東方の小パリ」などとも呼ばれました。1930 年代には満州国の建国に伴い日本人の流入が増えて、ピークの 1944 年には 15 万人にも膨れ上がったそうです。

そんなハルビンでロシアの残した遺物を見るのが今回のツアーの第１主題でした。

１．建物

ロシア正教の教会をはじめ、多くの西洋建築物が建設され、現代にその多くが残っています。ロシア建築のみならず、アールヌーボー、アールデコ、バロック、折衷主義など多くの様式で建てられた建築物を見る建物ツアーが出ているほどで、建物見物だけで数日はかかると思われます。

ハルビン市内にたくさんあるロシア土産の店。中に入ると、ロシアでは見かけないロシア製品と書かれた商品がたくさん並んでいました。ロシア産品で、中国でコピーできないものはないので、多くは中国産ではないかと感じました。そのためか、お客は稀でどの店も空いていました。

上の写真は、ハルビン市内中央大街からも近い聖ソフィア大聖堂。宗教的活動は行われていませんが、その装置としての聖堂は綺麗に残されており、中国政府の方針がよくうかがい知れます。

元のハルビン学院校舎。現在改装中で、どうやら今後何かに使われるようでした。ここで多くの日本人、中国人が共にロシア語を学び戦後も卒業生が日本の大学や貿易業界で活躍しました。

ロシア建築の遺産というよりもアールヌーボー建築と考

えた方が正しい旧ロシア人住居の内部。建築史研究家より詳しいお話を伺いました。

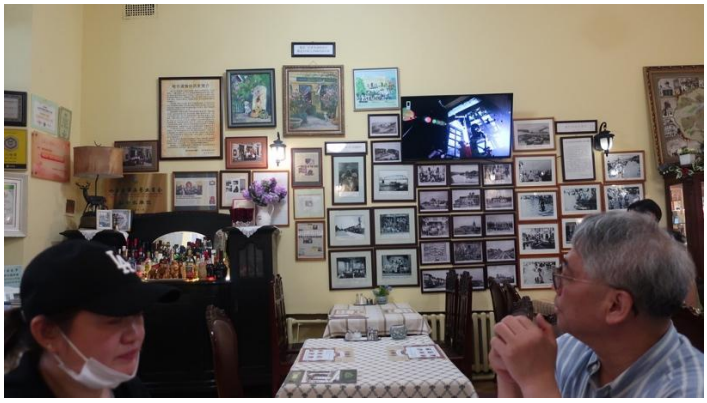
２．食事

個人的に最も関心が高かったのがハルビンのロシア料理。これが今回のツアーの第２主題でした。

我々の泊った中央大街にも老舗のロシア料理店が３軒もあり、それぞれがしっかり客を掴んでいることに驚きました。味については、ウラジオストックから近いこともあり、相当本格的なロシア料理を味わえると期待したのですが、料理名はロシア風ですが味はかなり違い、味付けは甘さが目立ちました。本場のロシア料理を知る我々には却って日本のロシア料理の方がよりロシアに近いと感じられました。

それでも店内にロシア人の写真などが飾られ異国情緒を演出、中国人の若いゲストに向けて戦前のハルビンを懸命に演じていることはわかりました。

中央大街にあるロシア料理店「タトス」。地下１階がレストランになっていて、100 席以上はあると思われる大箱でした。メニューには多くのロシア料理が載っていて、注文するとすぐに運ばれてくるのが印象的というか不思議。味は日本のロシア料理の方が上、という感じでした。



これは別のロシアレストラン。壁中に昔のロシア人の写真が貼られていて、この店がロシア人にいかに愛されていたかを示していましたが、今となっては全てが幻です。

３．ロシア企業

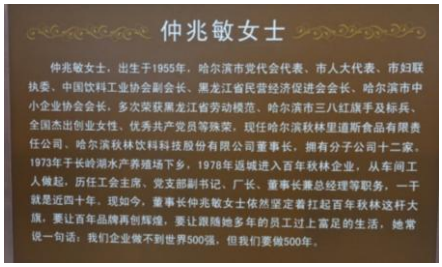
ロシア研究の観点から、海外に残ったロシア企業がどんな変遷をたどり現在に至るのか、海外で活動するロシア企業があまり多くないので、ハルビンのロシア企業は大変気になる存在です。

今回、我々はハルビンで活動する企業グループ「秋林公司」の飲料生産会社「秋林飲料生産企業」を訪問し、1930 年代から現在までの企業の沿革を伺うことができました。

聞いたところでは、同社に限らずロシア人起源の会社は全て中国企業となり、経営も中国人が行なっているそうです。ちなみに秋林飲料はロシア起源の「クワス」という発酵飲料で一躍有名になり、その後ハルビンの町中にそのクワスを提供するスタンドを作りました。このため、多くの人が「秋林」（チューリン）という名前を知っていますが、その起源は Churin というロシア人創業者の苗字から来ています。現在の経営者は仲兆敏という 1955 年生まれの女性。現在こそバリバリの中国共産党員のようですが、この会社で一工員から社長にまで上り詰めた人だと紹介されていました。

秋林（Churin）グループで最大の事業はハルビン市内でのデパート経営です。この写真は中央大街にある秋林デパートの建物。

ロシアではクワスは決して高級品ではありませんが、ハルビンでは綺麗なアウトレットがたくさんあって、ベースのクワスにフルーツをミックスしたような不思議な飲み物をかなりの価格で提供しています。



Churin 父子の紹介は皆無でしたが、現在の社長である仲兆敏氏の紹介は詳細です。仲氏がまさに中国共産党の求める人材であることがこ

の銘板から読み取れます。＜私たちは世界の 500 社に入ることはできないが、500 年続く企業になる＞という部分が中国企業の性格を表しています。

【長春の感想】

長春は、日本による満州経営の中心地にして、日本軍部の影響が極めて大きかった土地。満州建国時点から当時のソ連は満州の仮想敵国であり、ロシア文化が根付く要因はないため、私たちが眼にするロシア遺産は皆無でした。

【今回のツアーを総括して】

満鉄が走っていたハルビンから大連までの幹線を今、高速鉄道がハルビン－長春をわずか 1 時間で繋いでいます。そんな距離にも関わらず、両都市の性格は全く違い、個性に乏しい中国都市という私個人のイメージを見事に覆してくれました。

ハルビンの街にロシア人の姿はほとんどなく、ロシア人の作ったハルビンの街は今や完全に中国の街となりました。逆に言えば、ロシア人の作る文化、経済は外地においては根付くことが難しく、ロシア以外の土地で繁栄している姿を見ることはありません。

一方、中国人は中国外において活発な活動を行い、各地に中華街を作り、まさにチャイナワールドの実現を競い合います。この中国人とロシア人のバイタリティーの差が、中国人をして「ロシア何するものぞ」という姿勢を作り出していると感じます。満鉄の名物列車「あじあ号」の食堂車ではロシア人ウエイトレスが売りでしたが、ハルビンにおいてもロシア人のステータスは決して高いものではなかったようです。外地におけるロシア人の生活遺産を見ることで、ロシア人の精神構造というものがちょっとわかる気がしました。ただ、一概にロシア人といっても白系ロシア人と言われる社会主義ソ連と敵対して逃げてきた人々、そのかなりの部分がロシア系ユダヤ人だったというような複雑な問題もあり、ハルビンを通してロシアを見るというスタンスの有効性は続きます。

第 2 回国際会議「ロシアと日本：持続可能な発展への道」へ参加して

五十嵐　徳子（京都外国後大学教授）

2025 年 9 月 12 日、サンクトペテルブルグ経済大学のガスプロムホールで、第 2 回国際会議「ロシアと日本：持続可能な発展への道」が開催された。第 1 回は昨年 11 月 24 日に同大学の同ホールで開催された。日ロの学術・文化交流は、現在の厳しい状況下でも絶やしてはならないという故藤本和貴夫先生（大阪大学名誉教授、元大阪経済法科大学学長、大阪日本ロシア協会理事長）の強い意志のもと、サンクトペテルブルグ友好の家と同大学の協力を得て本会議が実現した。実は、藤本先生は第 1 回会議に日本側団長として参加する予定だった。しかし、昨年 10 月に駅で転倒し、怪我を負われた。それでも先生は、最後まで参加への強い意欲を示し、「主治医にはまだ言っていないが、無理をしてでもペテルブルグの会議に出席したい」と語っていた。私も先生が団長として同行してくださると信じていたが、残念ながら体調が回復せず、私たちだけで参加することとなった。

第 1 回会議終了後、ロシア側からは「来年は藤本先生にもぜひ参加してほしい」との温かい言葉をいただいた。そして、第 2 回会議が実現した。しかし、藤本先生は機能回復手術直後に脳梗塞を発症し、2025 年 4 月 22 日に逝去された。先生の葬儀には、サンクトペテルブルグ経済大学学長や友好の家の理事長から心温まる追悼文が寄せられた。会議の冒頭では、経済大学側が藤本先生の写真と紹介を掲示し、黙祷の時間を設けてくださった。今回の会議には、筆者を含む 4 人の日本人研究者とロシア側 5 人の研究者が多様なテーマで報告を行い、活発かつ真摯な議論が交わされた。その中で、会場の大画面に映し出された藤本先生の写真を見たとき、先生が本当に亡くなられたことを初めて実感した。藤本先生のイニシアチブがなければ、この会議は存在しなかっただろう。困難な状況下でも交流の大切さを改めて噛みしめながら、この報告文を書いている。